

やまぼうし



第5号

2022年4月



陶磁研究やまぼうし会
YAMABOUSHI CERAMICS RESEARCH SOCIETY

健やかに、陶芸でつながる喜び

2021年度も、コロナで始まり、コロナで終わりました。健康の大切さ、あたりまえの日常を過ごせるありがたさを感じずにはられません。科学や医学がいかに進歩しようとも、自然が為すことの前には人はあまりに無力です。医療関係者、さらにはエッセンシャルワーカーと呼ばれる方々の献身的な努力に感謝しつつ、人にできることは何か、あらためて考えさせられます。そのような中でも、陶芸を通して会員の皆様との交流が続けられることは、誠に嬉しい限りです。創る喜び、美を愛する喜び、そして人と交わる喜びは、まさに人にしかできないことです。本会の活動が、皆様の心の糧に少しでもなりましたら幸いです。

社会的活動の自粛が引き続き求められる状況下で、当会の活動も企画数、規模などの縮小を余儀なくされました。しかしながら、安全に配慮しつつ、会員相互、地域の方々との交流の機会を設けています。会員による恒例の文京区シビックセンターでの作品展をはじめ、技法講習会では芸大陶芸研究室関係者を講師に迎えて未体験の絵付けを含む作陶等を楽しみました。また、文京区立湯島小学校での5、6年生の選択科目(図工)の授業をお手伝いしました。さらに、本会の活動拠点である文京区の公共施設「アカデミー湯島」が主催する市民公開体験教室(陶芸)を協賛しました。毎週金曜日の10:00~16:00には、アカデミー湯島で、絵付け・焼成を含む作陶等を自由に、自主的に楽しみました。毎月1回、橋詰正英先生を講師にお迎えして、「天神陶塾」を開講して頂き、多様な陶芸技術をご教授いただいています。この冊子をご覧いただければ、会員の生き生きとした活動の様子が伝わってくるはずです。東京芸大公開講座(陶芸)の受講生が中心となって発足した当会は、その後、陶磁研究「やまぼうし会」と改名、現在78名の会員を擁するまでになりました。陶芸を通じた生きがいの実現や社会貢献・交流を目的としています。2022年度もさらに充実した企画を準備しています。ご参加をお待ちしています。土練り三年、轆轤(ろくろ)は六~十年と申します。コロナ後の人生の先を見据えて、ともに楽しんで参りましょう。

陶磁研究やまぼうし会 会長 落合 卓四郎



三上 亮 先生 作品



椎名 勇 先生 作品



豊福 誠 先生 作品



前田正博 先生 作品

日本の工芸作家を中心に若手俊英作家からベテラン人気作家まで、工芸の世界の第一線で活躍する作家の個展、グループ展を中心に展開しております。また催事期間以外の常設展示では、東京藝術大学を卒業された旬な作家を中心に揃え展示をしております。

作家物の作品を観て触れて「たなごころ」を存分にお楽しみ下さい。

山咲木
ギャラリー

〒103-0013 東京都中央区
日本橋人形町2-16-2 ユウビル1階
TEL 03-6661-6865
<http://www.g-yamasaki.jp>
FAX 03-6661-6896

<展示会会期中の営業時間>11:00~18:00

*会期中は無休 会期前後日休み

<展示会以外の営業時間>11:00~18:00

*展示会以外は、日・月曜日休み(臨時休業あり)

ギャラリー山咲木・山崎 哲也



第1回技法講習会 色絵・釉裏紅を使う釉描テクニックを学ぶ

2021年7月10日 アカデミー湯島 講師 橋詰 正英 先生



橋詰 先生からポイント説明



牡丹の骨描き



釉裏紅

静岡県熱海市の土砂流や九州地方の大雨被害など自然災害が多発中、東京は久しぶりの晴天で被害に遭遇された方々に申し訳ない気持ちで湯島に出向きました。

釉裏紅は銅彩によって赤や紫を発色し、色を安定させるのは一筋縄ではいかない気難しい技法と認識しており、いままで手を出せないでおりました。その技法講習というまたとない機会、ワクワクしていました。

先生ご用意の釉掛けされた皿に、先生オリジナルデザインの牡丹・姫林檎・野兎のうち1点を選び模写するのですが、私は一か月前に先生のボタニカルアートを体験していた牡丹の絵にしました。

皿に模写した絵柄を茶黒で線描きし、影を付け、フノリを加えた釉裏紅で花卉を、緑と茶色で葉と茎を色付けしました。

釉裏紅は濃すぎると黒く発色してしまうとのことで、先生は細かく説明、実演しながら一人一人の濃さを確認し、その後先生の工房にて還元焼成していただきます。

コロナ禍の中、緊急事態宣言や東京オリンピック開催が間近に迫り、世の中がざわついていいる中、一日中絵付けに集中できたことが幸せなことだと感じました。

後日出来上がった作品は、残念なことに花卉の半分ほどが色が抜けており、やはり難しい技法だと再認識致しました。再チャレンジの機会があればと思います。

江原 英子 記



橋詰先生

先生の牡丹・還元焼成



姫林檎ボタニカルアート題材



牡丹

第2回技法講習会 装飾技法を学ぶ 釉描

2021年10月31日 中野ZERO

講師 工藤 順子 先生

工藤先生とのご縁は22年前、原宿陶画舎の和陶部教室に通い始めてからであり、約5年間受講致しました。

久しぶりに工藤先生にご指導を受けることができ、すごく嬉しかったです。

「釉描」は、釉薬で絵を描くことで、今回は工藤先生からご提示された次の3種類のデザインの内、私は③を選択しました。①有田竹虎図 ②光琳竹虎図 ③クリスマスホーリー <*holly モチノキ科の常緑樹、赤や黄色の果実と葉を鑑賞する他、クリスマスの装飾にも用いる >

【制作手順】

1. 白マット釉を掛け、オバル型の焼き上がり皿(横23cm 縦19cm 深さ3cm)にふのりを刷毛塗りしたものを先生から準備していただき、
2. 仲だち(ねん紙写し)和紙に表に原画(先生が用意してくださったデザイン画を3つの中一つを選択)、裏から桐墨で描き、フェルトで表から擦り付け下絵を写す。
3. 仲だちした上を、茶黒絵具で骨描きする。
4. 先生から配布された色釉のテストピースを見ながら色を決めて、各色を伏せて描く。
5. 1230℃酸化焼成をする。

原宿陶画舎で30年間社会人をご指導なさった工藤先生は、昔と変わらず、とても気さくなお人柄でご丁寧に教えてくださって、感謝の気持ちになりました。

最後に、講習会にご参加されたやまぼうし会会員の皆様が今回学んだこの素晴らしい技法をそれぞれご活用され、たくさんの素敵な作品に反映される事をお祈り申し上げます。

朴 貞姫 記



工藤先生から説明



仲だち



骨描き



光琳竹虎



有田竹虎



クリスマスホーリー

第3回技法講習会 ひび割れ技法を学ぶ

2022年1月22日 アカデミー湯島

講師 西村 圭生 先生

今回の技法講習会は、西村先生に「ひび割れ技法」を教えてくださいました。

その名の通り、表面にひび割れをわざと付けてその模様を楽しむ技法で、発祥は米国だそうです。

まずは、ろくろでも手びねりでもよいですが、器を作ります。

その際にひび割れを付けたい箇所をすぼめた状態にしておくのがポイントです。

次にドライヤーを使って外側表面を乾かせたら、内側から押し広げていきます。

そうすると外側にひび割れができていきますが、広げすぎるとひび割れが深くなり

穴が開いてしまうので慎重に行います。

赤土の場合は化粧土を塗ってひび割れさせると、割れ目のコントラストを出すこともできます。

施釉は、ひび割れをそのまま見せたい場合は織部のような透ける釉薬を、強調したい場合は黒釉等の濃い釉薬を入れて表面は拭き取ると良いそうです。

私はひび割れ技法というものがあるのを今回始めて知りましたが、普段は「悪」と思っていた表面のキズであるひび割れをあえて付けて模様とすること、そのひび割れをコントロールする技もあることに驚かされるとともに、陶芸の幅の広さ、懐の深さも感じることができました。

貴重な技法を丁寧に教えて頂いた西村先生、アシスタントとして藝大陶芸研究室から来ていただいた的確に指導くださった下城 爽さん（大学院1年）、大槻莉子さん（学部3年）には、大変感謝しております。ありがとうございました。

阪永 卓宏 記



下城さん・大槻さん・西村先生



西村先生から説明



西村先生の完成見本



参加会員の作陶品



素焼き



本焼き

第4回技法講習会 造形性を学ぶ

2022年3月20日 アカデミー湯島

講師 御手洗 真理先生

補佐 前沢 幸恵先生

魅了される作品で知られる御手洗真理先生のもと定員を超える24名の参加を得て開講された。

(補佐 前沢 幸恵先生)

テーマ 石膏型で型取りされたボール状の磁土の器に描かれた「羽」の図柄をアルミカンナとステンレスコテを使って彫り、削る技法。

作業手順 先ず図柄の線に沿って外側の羽から内側の羽へと彫る。

羽の上部裏側は羽の重なり具合も彫って更に薄く削る。高台部にかけて線刻が浅くなるくらい削ってぼやかして仕上げる。

学んだ点 羽の質感と立体感をどう表現するか、彫りは平面的に留めず線毎に面取りし繊細さを出す。また欠損を避ける為、乾燥の進み具合や手の充がい方にも留意した。

結び コロナ禍にも拘らず、楽しく集中して受講できた。準備運営面に腐心された関係者のお力に感謝です。

川村 健司 記



御手洗先生から説明



御手洗先生・前沢先生



アルミカンナによる彫り



御手洗先生の完成見本

私の陶芸はじめ

荻須 謙二



点灯時のランタンI



ランタン

亡き妻と芸大の公開講座に参加したのが2014年、2016年でした。

それまでは、笠間、備前、鹿児島（薩摩）、山形、会津などの旅先で自己流の陶芸を楽しむ程度でした。時間の許す時は笠間の久野陶苑に出向き、妻は手びねり義母は炉端で休憩、愛犬は車中で居眠り、私はベルト駆動の轆轤に挑戦したものでした。要は年に一度か二度の七夕陶芸でした。

芸大の公開講座で豊福先生、三上先生方のご指導で、手びねり、上絵付講評と、初めて本格的な陶芸を体験する事が出来ました。

最近では電動轆轤を習い始めました。芸大名誉教授島田先生の指導講習会でいきなり30cmの大皿に挑戦、手取り足取りのご指導を頂き、完成した時は、我ながら感動しました。

今までに、手びねり、電動轆轤、板作り、下絵付、上絵付、白化粧、鑄込み、銀泥、練りこみ、金漆、金繫、陶板、などの技法を教わってきました。

兎に角、ノウハウのマスターと練習だと思っております。これからも種々の技法を学び作品に応用したいと思っております。

現在は、ランタン（陶灯）作りを目指しています。“木漏れ日の柔らかな光、カーテンの間から漏れる温かい窓のあたり”などを表現できればと、大それた目標を立てていますが、どうなりますか？

東京都美術館にて開催の、第55回記念国際公募 亜細亜現代美術展で習った技法を組み合わせた“陶灯B”を出品する機会に恵まれ、入選を果たしました。

島田先生、荒川先生、阿部先生のご指導に感謝致しております。また、やまぼうし会の皆さんに助けて頂き、楽しく作陶をする贅沢な時間を満喫できることを感謝致しております。

やまぼうし会の更なる充実と発展を祈念すると同時に、素人の作陶道楽を今後ともよろしくお願い致します。



ランタン II



第5回 作品展

於：文京シビックセンターアートサロン 2021年12月16日～12月19日

2年に及ぶコロナウィルスの流行により新たな生活スタイルを強いられてきましたが、私たちと同じく会員の皆様も自ら土を捏ねて焼きものを作ること、仲間や友人と陶芸を通して語り合い時を過ごすことの大切さを感じておられることと思います。会員の皆様は、飽くなき探究心で、東京藝術大学陶芸科出身の先生などによる様々な技法講習や研究を重ね技術や表現に磨きをかけておられます。本年は会員30名の参加によって第5回作品展を開催されるとのこと。それぞれのお人柄が作品からそこはかとなく感じられる個性豊かな暖かな会場になることを楽しみにしております。

東京藝術大学美術学部教授 三上 亮



三上 亮 教授



椎名 勇 准教授



茂田 真史 テクニカルインストラクター



高岡 太郎 テクニカルインストラクター



岩淵 真理 テクニカルインストラクター



田中 隆史 講師



荻込 華香 教育研究助手



高橋 侑子 教育研究助手



中舘 雄里 教育研究助手



赤坂 延子



孫 語崎



藤波 慎二



大出 ヒロ子



山中 峰雄



竹村 光子



坂口 明美



大熊 敏幸



阪永 卓宏



近藤 健



石川 久夫



合田 隆治



工藤 久仁子



鳴島 淳子



高野 静絵



加藤 史郎



北村 廣明



小松 幹夫



落合 博子



荻須 謙二



廣田 弘子



長濱 善子



石崎グロリエッタ



落合 卓四郎



江原 英子



末田 寛治



海老名 志文



根本 雅子



川村 健司



講評会 落合会長 三上藝大教授 椎名藝大准教授

ISCAEE について

東京藝術大学名誉教授、ISCAEE 会長 島田 文雄

国際陶芸教育交流学会 (ISCAEE) は私が東京藝大に在職していた1992年、アメリカタコマコミュニティ大学のリチャードマファフィ教授と東京藝大陶芸科との交流授業から始まりました。その後東京藝大陶芸研究室に客員研究員としてこられた清華大学教授の鄭寧教授、トルコのアナドル大学セラチョバンリ教授、そして東京藝大との姉妹校提携している韓国ソウル大学、英国サリー大学（現クリエイティブ芸術大学）が参加し、国際交流授業を各大学持ち回りで開催してきました。

交流授業を重ねていくごとに参加大学もふえ、学会設立の要望が挙りました。そこでこの学会の目的を陶芸の向上を目指す教員、学生、陶芸を志す人々が、世界陶芸の文化体験と技法の国際交換とし、2006年清華大学にて国際陶芸教育交流学会 (ISCAEE) を開催しました。以後イギリス、ケニア、韓国、アメリカ、日本、トルコなど各大学主催で巡回開催してきました。本年は、パンデミックの中、中国清華大学主催でウェブ開催となります。やまぼうし会の皆さんには長年、この活動に深い理解を頂き、参加はもちろんのこと、参加学生の経済的支援もしていただいております。感謝申し上げます。

ISCAEE 設立2006年 中国 清華大学美術学院



現地でデモンストレーションする島田先生

ISCAEE 2010年韓国HANGUO 江南大学 東京芸術大学学生作品



ISCAEE 2011年 東京藝術大学 学生集団共同制作



ISCAEE 日本支部の再スタートと

2021 ISCAEE 中国 寧波大学科学技術院 ZOOM 発表会

山中 峰雄

国際陶磁芸術教育交流学会 (ISCAEE) 事務局は 2019 年学会事務局を中国精華大学鄭先生のところに移されました。日本支部（日本陶磁芸術学会 JSCA）は島田先生が芸大退官後、日本陶磁芸術教育学会（JSCAE）専門な分野と、“やまぼうし会” に再編成されました。

ISCAEE の日本支部 JSCA は機能の再編成の結果停止状態になっていました。

2021 ISCAEE 中国の開催に伴い急遽島田先生より JSCA の事務局を推薦者7名で立ち上げました。

ISCAEE 日本支部の事務局代表として戸松様が担当されます。やまぼうし会の窓口として山中が担当することになりました。

2021 ISCAEE 中国の開催はコロナ禍で国際会議は ZOOM 会議として開催されました。

タイトル 越窯秘色ウェブ国際シンポジウム

場所 寧波大学科学技術院

日時 10月18日 日本時間 16時より

発表 7カ国 16名の発表

日本からは 芸大3名 やまぼうし会 2名の参加

やまぼうし会では、グロリエッタ（2回目の発表）山中が発表しました。

磁器土を用いた磁器釉の試作

山中 峰雄

木灰を利用した釉薬作りの挑戦と結果より、透明に近いマット状の釉薬を手に入れることができました。

その作業の手順と試作結果を作品の写真を交え発表しました。

例

磁土 SP-4 (丸石窯業製)
 自作釉 SP-4 : ニセアカシヤ灰
 7 : 3
 ミル掛 1～1.5時間

電気窯条件

温度 1 2 3 0℃ 15時間
 還元焼成 (プロパンガス)



BAROQUE ART

石崎 グロリエッタ

精神性はバロック芸術の基本的な鍵となります。イタリアはバロック芸術発祥の地とされており、何人もの芸術家とその優れた才能と宗教やキリスト教をテーマにした作品で知られています。ルーベンス、カラバッジョ、ベラスケス、レンブラント、ブッサン～16世紀から17世紀にかけての5人のバロック芸術家の名前は、豊かな色彩と幅広い個性的なスタイルが芸術を特徴づけるようになった時代のものである。バロックの偉大な思想家たちは、神を中心とした世界観を持っていました。バロックはポルトガル語で不規則な真珠を意味する「berrueco」に由来します。

バロック芸術の特徴

- ・誇張された感情
- ・強烈なドラマ - ストーリーテリング
- ・ドラマチックな色使い
- ・明と暗の強いコントラスト
- ・赤、青、緑などの深みのある色の使用
- ・ゴールドやメタリックカラーの使用



芸術における自己表現

ヨーロッパの大聖堂、フレスコ画、バロック様式の天井は私を魅了し、バロック様式の風景をボウルに描きたいといつも考えていました。クレイジーなアイデアのように思えますが、そんなアイデアなど存在しないしないという時が来ました。あなたの心にあるものは何でもあなたの物であり、あなたにはそれを好きな方法や媒体で表現する権利があるのです。

学んだ全ての技術を駆使して表現する

私は白磁に絵を描くのが好きです。ポーセリンアーティストとしての訓練を受けているので手造りのボウルに絵を描くことが多いです。

伝えるアート

アイデアや感情を伝えるアートは、私を魅了します。落書きは、女性の人生や夢について描いたように、素早く自然にアートを作るのに役立つラフで瞬間的なテクニックです。

コントラストと効果

コントラストは鮮やかなアートを生み出すための重要なツールとテクニックです。

三人展

青山桃林堂 2021年9月4日～9月19日

「三人展」は、伊藤珠子、佐野はるか、帆足桂。同学年ではないけれど世代が近く日頃から交流のあるメンバーです。土物二人に、青白磁が一人、各々好き勝手に制作して並べましたが、学生時代から知っている会場ですので、三人の作品群は見事に展示されました。

伊藤 珠子

39期生です。茨城県笠間市で制作しています。てびねりに原始的な装飾を施したり、ビビットな下絵の具で着色したりが主な作風です。手で作る土の優しが残るように、形体の揺らぎや、表面の土味が残ることを意識して成形、仕上げをしています。作品の発表は、陶器市から都内のギャラリー、最近自身自身のオンラインショップで、実用的な器を作る機会が増えました。実用性のなかに、遊び心…、というよりは、自我・エゴを盛り込み、万人受けからは程遠い実用食器となっています。買ってくれる人がいることに感謝の日々です。技法はシンプルで、てびねりに呉須や弁柄の絵付け、焼成は、還元や後還元（還元落とし）。赤絵も好きな装飾です。ほぼ毎日仕事場へ行き、制作して、家に帰って寝るという、単調な日々を過ごしています。



佐野 はるか

手びねりで作っています。大きな物は造形として、小さなものはジュエリーのように、と意識や気分も作風も分けて制作しています。作りたい形によって素地の素材も変えたくるので、焼き損じてしまうことも多いですが、土・磁土・釉薬・上絵、素材の違いや工程の違いで生まれる装飾を、必然的に纏ったかのような、造形と意匠が一体となった作品を目指し、日々作陶しています。



帆足 桂

2003年から2006年まで非常勤助手をしていました。現在、青白磁を中心に制作をしています。青白磁とは白磁の一種であり、白い素地に鉄分を微量に含む透明釉をかけて焼成したもので、中国では北宋時代から作られる様になり、景德鎮などが主な産地です。日本では16世紀頃に朝鮮より伝わり、有田の地で上質な陶石を含む地層が見つかり、今日まで盛んに磁器製品が作られる様になりました。

私の青白磁は有田の最上級の陶土で素地を成形し、釉薬に微量な珪酸鉄を添加し、高温(1280℃)の還元炎で焼成を施しております。素地の成形にはろくろのほか、石膏型による鋳込み成形を主にデザイン性のある形を意識し、制作しています。一方で学生の時から続けているトルソーの制作には陶土を使い、色釉や上絵を施し、青白磁には無い色遊びを楽しんでいます。



「出会い」

廣瀬 義之

会の皆様とは、柿傳で開催された藤本先生の内弟子のグループ展での出会いがはじまりでした。そこで陶芸に熱心な方々の存在を知り、後日青梅の藤本工房に取材にお見えになったと言う繋がりです。その際会報を何冊か見せて頂きましたが、中に載っているのは芸大の関係者の方々ばかりなので驚きました。会員の皆様も芸大で聴講された方々もいらっしゃるようで驚きを隠せませんでした。



私は豊福さんと三上さんの間に入る年代で、藤本、田村、浅野と言う三教授が陶芸講座と言う一つの講座に在籍されていた大変貴重な時期に恵まれた学生生活を送る事が出来ました。学校を出てからは藤本先生の内弟子として仕事をしていました。仕事の内容としては、先生の作品の完成品がある



とすると、その作品の絵付け以外の仕事は全てやりました。陶器に関する仕事以外では庭の草むしり、車の運転士、年末の先生のお宅の大掃除などあらゆる体験をして来たと思います。藤本工房と言えば磁器が中心だったせいか私の仕事も磁器を中心とした内容の仕事をしております。今振り返ってみると工芸科に入学した頃は立体物に絵を付けたいと言う願望が有り金属、漆、陶芸いずれを選択するか悩み、漆は体質に合わずどうしようかと思っていた所藤本先生の個展がデパートで有り、それを観て、陶芸に決めた、と言う経験があり、繋がっているんだなあと思っています。

「又、挑戦中」

内藤 六郎



昔、中学生の時に美術の教科書に載っていたクレタ陶器の壺の小さな写真。ふっくらした器体に、のびのびと描かれた蛸の絵柄。この出会いが将来、焼物の世界に進むことになったきっかけでした。いつか自分も大好きな生きもの達を自由に焼物に描いてみたい。そんな夢を追って、芸大を卒業して四年後、自然が豊かな山梨の山里に移住して作陶に専念することになりました。四季の移り変わりと共に日ごとに色を変えてゆく周辺の木々や草花。庭の水場に現れる小鳥達や、毎年近所で子育てをするフクロウ。山奥の溪流を遊び回るテン、意外なほどのんびりはこちらを見ているカモシカ、偶然出会ってしまった熊さん（一度、我が家の庭にも来ました！）そして雄大な山河の景観。絵のモチーフは限りなくあります。



この素晴らしい世界を焼物に表現してみたい。その想いでひたすら工夫を重ね、自己流ですが何とか少しずつ描けるようにはなってきました。それでも、もっと微妙で柔らかく豊かな色合いを表現できないものだろうかと思ひ悩む日々。そして昨年、自分の70歳という年齢とかなり老朽化が目立つ窯や仕事場の状況も考慮して、思い切って焼き物の世界を離れることを決心。山を降りて、元々好きで描き続けていた水彩画の世界に集中することにしました。その中で、焼物で表現しきれなかったより深い色彩の世界にどこまで近づけるか、ラストチャレンジということになりそうです。



掌に包み込む、人工の**宝石**が出来る

やきものを志したのは、土を自らの手で形作り、炎で焼くことによって堅牢な美しい石、いつくしむ宝物となる工程に魅了されたからです。科学的なことは分からないけれど、原料となる地表の岩石、地層の歴史を興味深く学び、やきもののメカニズムに産地特色の必然性を知りました。風土や文化、流通に現代陶芸の成り立ちを繋げ、畏敬の念を持ちながら、限りある地球の資源を大切に「今」を切り取った工芸でありたいと考えて来ました。自然環境とそこに生きる人々の暮らしの中から知恵や技術や美意識によって工芸が生まれる。生活の有りようを考え、豊かな想像力と創造的な発想によって生活に役立つものをつくりだし、快適で心豊かな暮らしを願う工芸を熱く次世代に伝えてゆくのも役目と考えています。プロダクト製品に溢れ、生活がミニマムになった現代の暮らしの中に心温まるやきものとは何か。気候の変動や社会情勢に定まることのない価値観を抱えつつ、試行錯誤は続きます。長い年月がむしやりに土と向き合ってきて、思うことは土と共に歩み、形を追う強い印象を与えるものではなく、静かで芯のあるものを作りたい。置かれた空間を包み込むような土の造形を目指して制作して行こうと思います。やまぼうしの会の皆様と出会えて、やきものに対する多角的視野を学びました。あらためて、陶磁研究の楽しみと奥深さが心を自由にする素晴らしい会と感動致しました。一日も早い平穏な日常と活動が戻りますようにお祈りしております。

工藤 順子



技法講習会を終えて

西村 圭生

今回の技法講習会は、ひび割れ技法をしました。手捻り、電動ロクロを使い皆さんが形を作りひび割れをさせていきました。この技法は見た事はあってもやり方が分からないという話がありました。最近ではYouTubeでなんでも見る事が出来ますが、映像で見るのと実際に教わるのでは理解の仕方が違います。ひび割れをさせるための形状、粘土の乾かし方、膨らましてひびの具合の見方と通常制作より決まり事も多く皆さんの戸惑いも多かったと思いますが一生懸命、制作に打ち込んでいると感じとる事が出来ました。粘土を触り皆さんが一から作り上げていく喜び、陶芸は楽しいと感じとって頂けたら、嬉しく思います。



受講会員の完成品



西村先生の作品

社会貢献 文京区立湯島小学校総合選択美術コースお手伝い

陶芸「楽しく使える食器をつくろう」

湯島小学校 5, 6年生総合選択美術コース 26名

授業 2021年11月4日<粘土について>11月18日<粘土成形>2022年2月24日,3月3日<色絵付け>

打合せに出向くと、高張先生は記念行事準備で御多忙でした。地域の方が講師になり授業を担い、すでにイラスト画、水墨画ができていました。陶芸は3コマの授業で焼き物について知る、作陶、絵付け、それに学校の窯が不具合為、焼成をお受けすることでした。あまりにも重大な役目に戸惑いましたが、貴重な体験をさせて頂くことになりました。

焼き物については、最近拾い集めた縄文土器の破片に触れ、粘土の質、造形、文様を観察し、日本最古の焼き物と称されること。そして今の粘土原料木節、蛙目、黄土、陶石に触れ、天然素材を高い温度で焼き白い丈夫な器ができることを話しました。

11月18日作陶には会員14名が参加し、手際よい準備でお手伝いに入りました。手ロクロを使い茶碗や鉢に、粘土を棒でのぼしカップや皿、そして馬上杯と自分なりの発想とこだわりの詰まった器になりました。作りながら気付きで文様を押ししたり、線を入れたり、貼り付けたりと装飾もできました。皆さんのできた喜びの顔が心に残る楽しい授業でした。

乾燥後、素焼きが無事に終わり、次の絵付け日程を待っています。

素焼きの器はカラフルに彩色され 楽しく使える器に変身することでしょう。唯一無二の器を手笑顔がこぼれ、食卓が華やぐことでしょう。

根本 雅子 記



カラフルな作品たち

文京区立湯島小学校創立150周年記念展示会

文京区立湯島小学校開校150周年記念行事「湯島ミュージアム」参加報告

湯島小学校は、東京府設立の小学校を前身として、「近代学校教育制度発祥の地」とされる伝統ある小学校です。当会は社会貢献活動の一環として、2017年2月より図工（陶芸）授業のお手伝いを続け、児童の個性溢れる作品を当会の研究展示会で公開しています。

2021年12月の150周年記念式典では、研究展示会を拡大し、他団体と合同による「湯島ミュージアム」が開催されました。当会からは、人形、スマホスピーカー、万華鏡など、普段とはまた趣の異なる作品を、13人の会員の方々にご協力いただき出品しました(写真)。微笑ましく、心和む作品の数々に児童たちも興味津々だったようです。同校は横山大観先生を輩出しており、芸術に親しむ児童が育ってくれることを楽しみにしています。



参考：湯島小学校 開校150周年記念事業運営委員会ホームページ

<https://www.yushimasho-150th.jp/> <https://www.yushimasho-150th.jp/our-history/>

『Out door art show - 千代田で土遊び -』

茂田 真史



2021年11月21、22日の二日間、3331 Arts Chiyodaにて『Out door art show - 千代田で土遊び -』と題して、作品展示と陶芸の「野焼き」と「楽焼」の成形工程ワークショップが開催されました。成形された作品は、翌月に山梨県北杜市の自然豊かな地で開催されるアートイベントで焼成する、というプログラムでした。講師を陶芸作家で東京藝術大学教員の茂田真史が勤め、同大学教員を含む複数のスタッフによりレクチャーを行いました。

本企画は、『Take out gallery』（アーティストが主催する活動）によって企画運営されています。コロナ禍で従来の展覧会等が敬遠される中、屋外でも開催できる作品展示やワークショップの実施を目指しました。

野焼き焼成は、縄文土器などと近い原始的な焼成技法です。現代だからこそ「土器」の魅力を再発見できると考えています。

また、本企画で特筆すべきは、小型の専用窯を設計・制作し、楽焼をアウトドアアクティビティの一つとして実施したことです。

こういった取り組みにより新しい陶芸や工芸、芸術の未来が開かれていくことを願っております。



博士学位審査

博士学位審査提出作品は《embracing-damage》です。「embrace」には抱擁するという意味があり、作品タイトルはダメージを抱擁するという意味になります。本作は、水蒸気爆発によって制作プロセスで割れた陶磁器を新たな造形の糸口として捉え、乾漆による造形を融合しています。博士学位論文では、このような割れた陶磁器に乾漆を融合した新たな造形表現を「陶壘」と定義すると同時に、この発想の背景にあるアートプロジェクトにおける割れた陶磁器の役割について論じています。陶磁器において割れることは予測できないため、この水蒸気爆発も止むを得ない事態でした。しかし窯を操作していたのは私自身であり、割れた陶磁器を目の前にして自責の念が生まれました。本作では、割れた陶磁器が地面に落ちる前に柔らかいクッションのようなもので包み込んであげたかったという気持ちから、割れた陶磁器を柔らかく包み込むような形状を乾漆によって表現しました。

布下 翔基



新入会員紹介



会員番号 2014178

栗田 秀美

この度コロナ禍で環境も変わり、時間的な余裕が出来た事で入会させて頂きました。

「やまぼうし会」様には、講習会にも参加させて頂いた経験がございます。

陶芸の未だ知らないことが多く、視野を広げ学びたいと思っております。どうぞ宜しくお願いします。

アガデミー湯島体験教室 報告

11月26日 10時～12時 学習室 中国からの留学生を含む4名が参加 皆さん初めての陶芸といわれましたが、ご自分なりの形を丁寧に作り上げることができました。

この体験を通してやまぼうし会のお仲間が増える事を願います。

根本 雅子 記

※2022年2月12日 山中峰雄会員を講師に同様の体験教室があり、来年度(2022年)入会希望者が2名ありました。



トピックス

三上 亮教授が初上梓された「三上 黒」MIKAMIKURO 三上亮 酒盃 2000-2019 の出版記念展が2021年12月22日-12月31日に中央区銀座1-28-15 鈴木ビル1Fの森岡書店で開催されました。会場は5坪の小さなスペース。2015年オープン以来毎週1室に1冊の本を取り上げて扱うユニークな書店です。その1冊の本に纏わる様々なイベントを通して1室全体でその本の世界を表現するアートスペースでもあります。開催期間中は「三上黒」の世界が展開され本と同時に新作の酒盃の展示販売も行われました。



珠玉 ギャラリー



取扱作家

豊福 誠、三上 亮
上田哲也、望月 集
丹澤裕子、林 妙子
深谷 泰、百田 輝
平井雅子、今井一美
椎名 勇、長谷川奈津
高岡太郎、小林佐和子 他



使い込むごとに魅力が増す日常の作家ものの工芸品を扱っております。



〒173-0004
東京都板橋区板橋 2-45-11
TEL 03(3961)8984
常設時は日曜・水曜・祭日定休
展覧会会期中は無休
10:00～18:00
展覧会翌週の月曜日は臨時休業
<http://www.suigyoku.com/gallery.html>

大倉陶園

良きが上にも良きものを

since1919



■ 本社店

〒245-0052

神奈川県横浜市戸塚区秋葉町 20 番地

TEL : 045-812-8588

営業時間 10:00 ~ 17:00 (土日休・祝不定休)

■ 帝国ホテル店

〒100-0011

東京都千代田区内幸町 1-1-1 (帝国ホテル地下アーケード)

TEL : 03-3503-6020

営業時間 10:00 ~ 19:00 (日曜・祝日~18:00)

※都合により営業時間は変更になる場合がございます。



九谷絵具・陶芸材料・上絵付筆

千園堂



〒923-1112

石川県能美市佐野町イ1-5番地

TEL 0761-58-5711

FAX 0761-58-5677

利便性・機能性の両立

シンリュウは電気窯・灯油窯・ガス窯・薪併用窯・穴窯・登り窯をお客様のニーズにあわせて設計制作しております。



前扉式電気窯 MKF-10 型

カタログ
無料配布中!

シンリュウ

検索

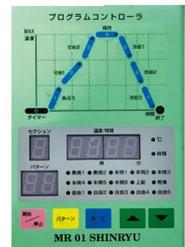


粘土・釉薬。小道具多数ご用意!

- 初めて窯を購入される方にも安心な簡単操作と省エネ設計。
- 酸化・還元が自由自在 (RFタイプ)。
- 全自動焼成装置 (MRマイコン) 付。
- 焼成パターンが入力済、さらに新規パターンも追加可能です。
- スタート時間の予約もできます。



最新高性能マイコン
簡単操作であらゆる
焼成パターンを設定可能。



シンリュウ株式会社

本社 (旧 新編北信)

〒351-0001 埼玉県朝霞市上内間木 514-2

TEL.048(456)2123 FAX.048(456)2900

E-mail info@shinryu.co.jp

URL http://www.shinryu.co.jp

神奈川支店 TEL.046(295)1641 FAX.046(295)1624

北関東支店 TEL.0296(72)9950 FAX.0296(72)9952

東北支店 TEL.022(288)2651 FAX.022(288)2652

信楽支店 TEL.0748(82)4166 FAX.0748(82)4169

☆「陶芸総合カタログ」全128ページ・フルカラーを無料配布しています。ご請求は本社、各支店にお願いいたします。☆オンラインショップもご利用ください。



東京藝術大学 × 小学館
 藝大アートプラザ共同運営事業
 ～藝大出島プロジェクト～

藝大アートプラザ

藝大の学生、先生、卒業生の作品が
 展示され、購入できる場所です。
 学内での研鑽の成果を、社会に、世界に
 届ける賑わいの「出島」です。

東京藝術大学(音楽学部)	上島 珈琲	東京国立 博物館
← 谷中・榴津		上野駅 方面 ↓
大学 美術館		東京都 美術館
東京藝術大学 (美術学部)		
藝大アートプラザ		

artplaza.geidai.ac.jp

〒110-8714
 東京都台東区上野公園12-8
 TEL050-5525-2102

営業時間 10:00～18:00
 休業日 月曜日(祝日の場合は営業し翌平日休業)、展示替え日ほか

編集後記

会報誌発刊に際しましては各先生方会員の方々にご寄稿頂きまして
 お礼を申し上げます。<赤坂 延子

コロナ禍が長引き今年度はどうなる事か?技法講習会もままならず
 記事の充実が心配されましたが先生方からの寄稿を送っていただき、
 発行までに至りつきました。ありがとうございます。<大熊 敏幸

コロナ禍が続くなか 第5号の発刊をすることができ とても安堵
 しております。編集委員のチームワークの良さが発揮されたと思い
 ます。<落合 博子

取材のたびに、会員の皆様の陶芸に対する情熱をじわじわと感じる
 一年でした。<高野 静絵

作陶が好き・絵付が好き・鑑賞がすき、多様な興味と関心を持つ会員・
 委員、何をどう取り上げるか、迷い続けました。<竹村 光子

2年半に及ぶコロナ禍と茂貫編集委員長活動休止の中での編集活動
 でした。対面と ZOOM 会議を交えて委員全員活発な意見交換を重
 ね第5号をお届け出来る運びとなりました。これもひとえに関係者
 の皆様のお力添えの賜と感謝申し上げます。編集長代理 嶋島 淳子

発行年月日 2022年4月 発行責任者: 落合 卓二郎
 揮毫: 島田 文雄 東京藝大名誉教授
 表紙作品: 三上 亮 教授 裏表紙: 椎名 勇 准教授

